

A—58 大都市における主食パターンの社会階層
別格差
東京のばあい

厚生省人口問題研究所 内野 澄子

1. この報告は、現在実行中の主食形態のパターンに対する態度を、特にパン食希望の有無を中心として、社会階層別に検討を加え、食慣習に対する改善意欲なり、関心が社会階層によってどのように異なっているかをあきらかにしようとしたものである。

2. 以上の目的のために東京23区より約1200世帯を抽出し（昭和38年）、世帯主の就業形態（就業事業所の種類ならびに職業別）、世帯主の年齢、教育水準、所得水準等の指標によって、主食形態に対する態度との関係を検討した。

3. 主食形態のパターンについては、(イ)3食ともに米食、(ロ)朝パン食、(ハ)昼パン食、(ニ)ときどきパン食に分類し、それぞれのグループについて従来の主食形態希望の集計を行なった。

4. 分析結果の要点はつぎのごとくである。現在3食ともに米食であるばあいにおいては、職業、教育、所得水準等において高い社会階級ほどパン食希望者が多い。しかし、すでに朝パン食のパターンをとっているものについては、反対に低い階級においてパン食強化の希望を示しているものが多い。このことはパン食内容に対する認識が社会階層によって異なっていることによるものと思われる。朝パン食者の中で、低い社会階層のパン食強化の希望が高いことは、食生活に対する関心度の高さを示すものであるとしても必ずしもそれが望ましい内容のものであると考えられない点に根本問題があるようである。